反ファシスト政治犯収容所における
エルネスト・ロッシの知的抵抗
――「ヴェントテーネ宣言」執筆過程の理解のために――

八十田　博　人

はじめに

欧州統合運動の歴史的文書として著名な「ヴェントテーネ宣言」（Manifesto di Ventotene）が，その名の通り，ティレニア海の離島ヴェントテーネ島にあった反ファシスト政治犯収容所で執筆されたことはよく知られている。この「宣言」は特に戦後の欧州統合運動で活躍したアルティエーロ・スピネッリ（Altiero Spinelli）に結びつけて記憶されているが，同じ収容所にいて部分的にも執筆したエルネスト・ロッシ（Ernesto Rossi）や，協力したエウジェーニオ・コロルニ（Eugenio Colorni）の名も同様にかなり知られているといってよいだろう。コロルニの夫人であったウルスラ・ヒルシュマン（Ursula Hirschman）が本土の反ファシスト運動家と密かに連絡をとっていたこともまた，比較的知られている[(1)]。

しかし，「ヴェントテーネ宣言」に大きな影響を与えたライオネル・ロビンズやハイエクの文献は主としてロッシが利用していたものであり，そのロッシは著名な経済学者ルイージ・エイナウディと連絡をとり，文献の提供も受けていたことを知ると，そもそも政治犯収容所でそのようなことが可能だったのかという疑問を持つ。実際は，収容所には相当数の図書が所蔵された「図書室」があり，ある種の知的活動が可能だったことが分かっている。さらに，その背景には，食事などの作業は政治犯たち自身に委ね，一定の領域内で散歩や海水浴も許されていた特殊な離島の収容所の環境がある。

こうした収容所生活のディテールについては，数多くの元政治犯の回想に散見するものの，まとまったイメージは主要な学術文献からうかがうことは難しく，近年現れたローカル史家の著作[(2)]でようやく全体像が明らかになった。そこで，この論文では，こうした著作を手がかりに，ロッシの関連文書や，その他の政治犯の回想等を交えて，反ファシストたちの収容所内における知的活動がどのようなものであったかを明らかにし，エルネスト・ロッシが戦後に欧州連邦主義者および急進主義者として活躍する知的基盤を収容所でいかに形成したかを分析し，「ヴェントテーネ宣言」執筆過程の理解に役立てたいと考える。

1. 政治犯収容所の設立

ファシスト政権といえども，自らが制定した法的なプロセスに従って政治犯を収容した。政治犯を特別な収容所に入れるというアイディアは，直接的には，1924 年から 1925 年にかけて連続して発覚したムッソリーニ暗殺未遂事件に対応したものであった。まず，1926 年政令 1254 号には，「公共の安全にとって危険な者は収容所に収容できる」とあり，その対象は一般の刑事犯のほか，「国家政治・経済秩序に暴力的な意見を表明した者」も含まれた。これは，法学者のジュリアーノ・アマート（Giuliano Amato）の解釈によれば，犯罪事由を特に限定せず，反体制のあらゆる活動や意見を対象とできるようになっており，本来の公安からも離れた，極めて政治的な規定になっているという[(3)]。

もっとも，この政令が全国に発せられても，すぐに政治犯は増えなかったという。1926 年時点では，もはや公然と政治活動を行える反ファシスト政党は存在せず，反ファシストは地下や国外に潜伏していたためである。そのため，取り締まりの実を上げるためにも，当時さほど目立った活動をしていなくても，旧来の政党活動家から始まり，元議員や反ファシスト的知識人や，弁護士などの知的専門職で疑わしいとされた人々が次々と拘留された。特に，共産党は最も危険な勢力と見られ，1926 年には共産党の全代議士が逮捕され，さらに元議員たちに拘留対象が広がった。社会党，共和党，自由党の元代議士や，ファシスト党の元代議士ですら反体制と見られた者は逮捕された[(4)]。翌年になると，逮捕状発令は 2,321 件と急増し，1930 年代に入ると，毎年千件を超える発令が常態となる[(5)]。

2. 離島の政治犯収容所の特殊性

離島が多いイタリアでは，囚人を離島に送ることは古代から行われていた。その後の時代にも例えば，ヴェントテーネ島の目の前にあるサント・ステーファノ島には，フーコーが『監獄の誕生』で考察したパノプティコン型の監獄が，ナポリ王国のブルボン王家によって作られていた。現在では，こうした離島はもはや刑務所に使われることはなく，かえって産業化の波に揉まれず自然が保護されていたことから小島マリン・リゾートの観光地になっている。

政治犯収容所を離島に設置した理由には，ムッソリーニ政権としても，反対者の数を明示することで反ファシストに力があることを示したくなかったこともあるという[(6)]。政治犯はいったん，離島に連れてこられると，特定の建物に常時閉じ込められるのではなく，特定のブロックに限って，歩行や散歩，海水浴等も認められた。このような施策を，コルヴィシエーリは，「ムッソリーニはヒトラーと違い，反対者を殺すよりも，孤立させ，笑いものにし，やる気をなくさせ，降伏させるのをよしとした」と分析している[(7)]。

囚人たちは，当初は他の囚人と混在で，シチーリアのファヴィニャーナ，ランペドゥーサ，ウスティカの各島に送られ，さらに同じくシチーリアのリーパリ，パンテッレッリア，トレーミティの各島も満杯になったので，政治犯の他の囚人からの分離を行うため，移転が図られた。

新しく政治犯収容所が作られたティレニア海の離島ポンツァ島，ヴェントテーネ島ともにもともと犯罪人が送られてきた歴史のある島であり，そこに政治犯を送ることが辱めを加えることになっていた[8]。現在，両島には中部イタリアのラツィオ州の港町フォルミアから高速艇で 1 時間，カーフェリーで 2 時間で到着するが，当時の船舶の速度では数時間を要したという。

3. ロッシの逮捕の事由と監獄での知的活動

エルネスト・ロッシは，カルロ・ロッセッリを中心とする反ファシズム抵抗組織「正義と自由」（Giustizia e Libertà）に参加していた。20 年代には，フィレンツェでやはり反ファシスト運動家として名高い政治学者ガエターノ・サルヴェーミニ（Gaetano Salvemini）がフィレンツェで主催する「文化サークル」（Circolo di Cultura）にも通い，第一次世界大戦開戦前には『ポポロ・ディターリア』（*Popolo d'Italia*）や『ウニタ』（*Unità*）などの新聞を編集していたサルヴェーミニに協力している。その後，トスカーナ州の農業雑誌の編集を手掛けた後，ディーノ・ヴァンヌッチ（Dino Vannucci）の雑誌『自由イタリア』（*Italia libera*）に加わったことで反ファシスト運動の活動への関わりを深め，1925 年には一時，身の危険を感じ，パリに逃れた。数か月で帰国し，ベルガモのヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世高校で経済科目の講師を務めるが，1930 年 10 月 30 日に同校で授業中に逮捕された[9]。

ロッシの逮捕の直接的な事由は，偽名で国外亡命を図り，偽造旅券を所持していたこととされている[10]。ロッシはまず，ローマ郊外のレジーナ・コエリ監獄に収監された。この監獄内でロッシが主として研究したのは，財政，金融，関税，農業政策，社会法制などのテーマであった[11]。特に経済分野では刑務所内でも多くの雑誌を購読し，外の社会の進展に注意を払っていた。妻や母には食料を送る代わりに，本を送ってほしいとも書いている。

ミケロッティは，ロッシが監獄内で固めていった思想的立場は，「自由主義的社会主義」（socialismo liberale）を唱えたカルロ・ロッセッリにも近い，物質面よりも倫理面に重点を置いた「倫理的自由主義」（liberalismo etico）だとする[12]。ミケロッティによれば，社会正義については，フェビアン協会の影響もあるが，フィリップ・H・ウィックスティード（Philip H. Wicksteed）の *The Common Sense of Political Economy*（1910 年）が大きな影響を与えた。ロッシはこの本を自身の思想と一致する文献と見なし，翻訳を試みるほど傾倒していた。この本はまた，自由主義者ながら貧困対策を重視し，雑誌『社会改革』

（*Riforma sociale*）を主宰するなど，社会政策の重要性を訴えていたエイナウディ[13]とも共鳴する見方であり，エイナウディはこの本をすべての公僕が読むべきと推している。

ウィックスティードの基本的な考え方は，民間の力による資本主義と国家による介入のバランスを取るというものであった。ウィックスティードによれば，経済成長には個人の自由が重要だが，成長に取り残された人々が多く出れば，成長そのものにもやがて限界が生じる。それを防ぐために，国家は個人を競争の前に平等なスタートラインに立たせなければならない。ロッシは，こうしたウィックスティードの思想を後に「個人主義という馬を社会主義という荷車につなぐ」と例えている[14]。

これらの専門分野と同様にロッシが力を入れた分野は歴史で，特に近代史の文献への感想にロッシの思想傾向が顕著に表れている。ロッシは，左派知識人の代表格サルヴェーミニの『フランス革命史』（*Storia della rivoluzione francese*）を愛読し，左派よりの自由主義者グイード・デ=ルッジェーロ（Guido De Ruggiero）の『ヨーロッパの自由主義の歴史』の読後感は微妙であり，反ファシスト知識人の代表格で自由主義者のベネデット・クローチェの歴史叙述[15]はジョリッティを賛美する筆致に同意できなかったようである[16]。

ロッシは，9年間の収監後，すぐにヴェントテーネ島に送られることになる。閉鎖されたポンツァ収容所からも多くの囚人がヴェントテーネ島に移されてきたが，ロッシの場合は最初からヴェントテーネへの送致となった。

4. 収容所の生活

ポンツァ島やヴェントテーネ島の政治犯収容所には，警察と国家治安警察（憲兵隊）とファシスト民兵[17]が配置されていたが，囚人たちの日常的な監視は実質的に非公式のファシスト民兵に任され，彼らには囚人たちへの嫌がらせや暴力，拷問等が黙認されており，公式の監視役であるはずの警察はファシスト民兵の対応が度を越した場合のみ，介入するだけであった。警察はむしろ手紙の検閲などの行政的事務や特定事件の捜査などに従事し，治安警察は地元住民に関する問題や定点監視，囚人の移送・護送等が主な任務であった[18]。

囚人たちは，収容施設から数百メートルの特定のブロック内であれば，日に2回の点呼に集まるほかは自由に散歩できた。ただし，多数で集まる集会は禁じられており，後に規制が厳しくなると場合によっては，2，3人の談話でも咎められることになった。共産党の幹部など「危険人物」と目された者には1メートル以内に3人の武装民兵が付くこともあった。

生活の基盤である食堂は囚人たち自身が運営したが，地元住民やファシスト民兵もかかわっていた。床屋，洗濯，靴屋，洋服屋は囚人で心得のある者が担当していた。政治犯たちには，当初1日10リラが支給されていたが，これが警官の給料の1日分よりも高かったため，5リラに減額された。減額の際に抗議した囚人には監獄送りになった者もいるが，囚人たちが地元業者からの食糧共同購入組合を作るなど工夫して，1日4リラでなんとか生きていける

だけの食事はできるようになった。その中身は，朝はカフェラテ 1 杯のみ，後は昼食とごく軽めの夕食で，いずれも一皿というものであった[19]。

スピネッリやコロルニのように学のある囚人たちは，地元の商人の子どもたちにイタリア語やラテン語を教えることで多少の食料や現金を得た[20]。ロッシは翻訳で少額の収入を得たが，食料不足でウエストが 18 センチも細くなってしまい，ズボンがダブダブになってしまったと嘆いている[21]。

囚人の中には収容前に生協で働いていた社会党員がいて，組合組織のように収容所内の組織をまとめ，尊敬を集めていたが，この人物はロッセッリがリパーリ島から脱走したときに一緒に逃げる予定だったが失敗し，収容されていたもので，後に収容所から解放された後，ファシストに殺害されたという[22]。

収容所は，多数のカメローニ（cameroni），つまり「大部屋」と呼ばれたように，すべて平屋建てでそれぞれ 100 台くらいのベッドが並ぶ建物群であった。その大部屋の建物の一角に食堂がある形で，この食堂がそれぞれイデオロギーごとに分かれた。ただし，用地が限られていたポンツァ島では，使われなくなった古い兵舎やブルボン王家時代の城砦も使われた。より大きな用地に多数の「大部屋」が設置されたヴェントテーネ島に政治犯収容所が移されると，食堂は政治的イデオロギーごとに 10 数か所に分かれた[23]。

最大勢力は共産党で，約 800 人の収容者のうち，約 400 人が共産党員であったが，一個の党支部のように組織化されて統率が取れていた。これだけの人数であるので，ヴェントテーネでは，共産党員だけで食堂も 7 つから 8 つ設営していた。共産党が恐れたのは，警察の潜入捜査と党内の反発者によるイデオロギーの汚染であった[24]。共産党はファシストに主たる政敵と見られたために幹部が根こそぎ逮捕され，マウロ・スコッチマッロ（Mauro Scoccimarro），ピエトロ・セッキア（Pietro Sechhia），ジュゼッペ・ディ=ヴィットーリオ（Giuseppe Di Vittorio），ルイジ・ロンゴ（Luigi Longo）ら，戦後の共産党の指導者となる人々が集まっていた。

党幹部のうち，トリアッティなどがソ連に亡命し，国内に司令塔のいない共産党は，ソ連共産党に従順な組織となっていた。収容所内でも党内のイデオロギー論争は行われ，よく知られているようにスターリンのモスクワ粛清を批判したスピネッリは除名され，共産党グループを離れた。一方，ヒトラー打倒のためにブルジョワ民主主義国との共闘を訴え，収容所内で共産党を除名されたウンベルト・テッラチーニ（Umberto Terracini，後の憲法制定会議議長）[25] は共産党員の食堂に残り，それまで通り他の共産党員と一緒に食事し続けるが，完全に無視され，「こんにちは」以外の言葉は掛け合わなくなったという[26]。そのテッラチーニとロッシは親交を結ぶことになる。

二番目に大きな勢力は，アナキストであった。イタリアにはバクーニンなどの影響を受けたエッリコ・マラテスタ[27] などのアナキストの伝統があった。彼らは収容所内でカフェも作っていたが，もともとは労働者であった。自由主義者のサルヴァドーリの回想によれば，

彼らは異なる政治的主張の人々にも親切だったが，共産党の権威主義的な傾向だけは嫌い，それはロシア革命で自由な労農共同体の連邦結成を目指したアナキストの理想を挫いたのが共産主義者であったからという[28]。

第三のグループは，「正義と自由」の活動家や社会党員，共和主義者，フリーメーソンなどの自由主義者の混合であった。また，同じ社会党員でも改革派も最大綱領派もいて，リソルジメントの解釈をめぐっても，共和主義者のようにマッツィーニを理想視する者とそうでない者がいたが，共通点があったという。スピネッリやロッシ，コロルニはこれに属したが，社会党員では戦後に大統領となるサンドロ・ペルティーニ（Sandro Pertini）がいる。「正義と自由」を中心とする食堂Ｉの壁には，ロッシが島で調達した絵具で囚人たちをユーモラスな絵に描いた。ここから分かれてスピネッリやロッシを中心とする欧州連邦主義者たちが食堂Ｅを設営したが，たまたまヨーロッパの頭文字であるＥの記号が付いたので，ペルティーニはこれを「ヨーロッパ食堂」と呼んだ[29]。

この他に，発祥の地である米国との関係を危険視された「エホバの証人」[30]の信者の小グループがいたほか，若いアルバニア人のグループがいて，彼らはイタリアの学校で学んでいたが，イタリアのアルバニア侵攻に抗議したために捕えられたものであった。

5. 収容所内の図書

ポンツァおよびヴェントテーネの収容所には図書室があり，これが各グループが唯一共同で管理する施設で，管理のための委員会もあった。囚人たちが持ち込んだり，残したり，家族から送られてきた本が集まり，1日に50人ほどの囚人たちが活発に利用していたが，後に各人から月2リラの会費を取り，本の購入も行った。新刊案内も入手し，月に100冊もの注文も出したこともあり，出版社から割引も受けていた。ヴェントテーネ島には2か所に図書室があり，そのうちの一つには囚人による床屋と読書室が併設されていたという。リパーリの収容所が閉鎖されるとその図書はポンツァに移り，ポンツァの収容所が閉鎖されると，その図書はヴェントテーネとトレミティの収容所に移送された[31]。

図書には警察の認めた合法的な蔵書と，密かに所蔵されていた非合法の蔵書があった。収容所当局は，囚人たちに送られてくる本を検閲し，認められた本には収容所の印が押され，定期的に非合法の文献がないか検査も行っていた。ただし，収容所の警察の検閲能力には知的な限界があったため，意外な文献が検閲をパスしてしまう場合もあり，特に外国語の文献は現場でほとんど判断できず，本土の警察や官庁の判断を仰ぐために送られ，多くはそこから戻ってこなかった[32]。ロッシの場合，自由主義的な経済学者だったために，政治的な匂いのしない専門文献と見なされ，検閲をパスしたことが多かったと思われる。

非合法の蔵書は当然ながらリストは残っておらず，合法の蔵書についてもポンツァ時代の1935年時点のリストのみが残されているのみであるが，それには約2,500冊が掲載されてい

る。持ち込み制限や経済的な困難にもかかわらず蔵書は増え続け，ヴェントテーネに移った後の蔵書数は最終的には約 3,000 冊に及んだという[33]。

合法的な蔵書には，19 世紀の外国文学，例えば，ゴーリキ，トルストイ，バルザック，ユゴーなどの名作のほか，逸話的ないしロマン主義的文学が目立つが，アルベルト・モラヴィアの『無関心な人びと』[34] やカルロ・ベルネーリ（Carlo Berneri）の『三人の労働者』（*Tre operai*）など当時の新傾向や反ファシスト的ともいえる小説も含まれていた[35]。なお，珍しいところでは，当時世界の文学を訳していたミラーノのトレーヴェス（Treves）社のシリーズにある徳富蘆花の『不如帰』のイタリア語訳，*Nami e Takeo* もリストに残っている。

歴史は古代から現在まで関心が高く，バルバガッロ，クローチェ，カーライル，テーヌ，モンドルフォなどイタリアおよび欧州各国の古典的な作品のほか，特にリソルジメント期が充実していた。クオコ，コレッタ，マッツィーニ，カッターネオ，ラブリオーラ，フェッラーリ，スパヴェント，ピザカーネ，デ=サンクティスなどの著作であるが，特に共産党員の関心が高く，統一国家のまだ成せぬ民主化の完遂を考えるという意識で読まれていたという[36]。

しかし，当局の規制は次第に厳しくなり，図書の検閲の判断ができる知識のある警官が配置されるようになったほか，2 か所あった図書室のうち，共産党員が多く利用したローマ通りの図書室は閉鎖され，その閉鎖に抗議してハンガーストライキを行った囚人たちは逮捕され，監獄に移送された。図書はもう一つのオリーヴィ通りの図書室にまとめられ，当局は直接管理に動いたが，そこでも囚人たちの激しい抗議を受けたので，むしろ過度の管理強化は囚人の管理に支障が出ると考えられ，規制を徹底はせず，図書室の運用も大きく変えなかった[37]。

6. ロッシの収容所内での読書

ロッシは学者らしく，収容所からも妻や母に宛てた手紙に本や論文などの読書や執筆についてよく書いている[38]。手紙を通じて，甥のヴィットーリオには妻宛ての手紙を通じて，農業経済に関する本の題名を上げて読書の助言もしているくらいである[39]。ただ，ロッシは，他の収容者の読書や研究の様子には不満もあったようで，妻に宛てた手紙で，収容者は政治，哲学，文学史などばかり学び，経済，行政，司法などの具体的問題についてはあまり学んでいないと述べている[40]。

もちろん，ロッシ自身も哲学，文学，歴史など教養的な本は多く読んでいる。キュリー夫人の伝記[41]，ヴェルジャーエフの小説，ムーアの宗教史[42]，オックスフォード版アメリカ史[43] などが手紙に現れている。クローチェが主宰する評論誌『クリティカ』（*Critica*）は何年分かのバックナンバーがあったようであり，誌上に掲載されたジョルジュ・ソレルとクローチェの往復書簡に見られるソレルの筆致が特に気に入ったようで，「彼の人間や同時代の出来事，社会主義者，ユダヤ人，戦争，ダルマツィア等々に関する解釈は卓越している」と述

べている[44]。

ロッシの嘆きにもかかわらず，実際には，各グループで様々な学習活動も行われていた。共産党は，検閲を通過した経済紙『イル・ソーレ』（*Il Sole*）や，イタリア銀行年次報告書，大企業の年次報告書，統計年鑑，雑誌等を用いて，経済研究グループを組織していた。これらは個人での勉強が済んだ後，議論の叩き台となるメモを用意し，集会は禁じられていたので，メモを往復するなど複雑な方式で議論をした。基本的には議論したい人との個人接触となり，そうした場面では，それぞれの研究の深度よりも，活動経験の多寡によって会話内容が定まり，ベテランの党員は自分の活動経験に頼って語ることも多かったという[45]。

共産党員たちの研究は，マルクス・レーニン主義のイデオロギー的議論になることもまま見られたが，経済研究グループを率いるピエトロ・グリフォーネ（Pietro Grifone）は，ロッシなど非党員でも経済の専門知識を持つ者とは，メモを交換する形で議論していた。今日，その一部のメモがロッシの個人文書に残っているが，小さな紙に細かい字がぎっしり書き詰められている[46]。テッラチーニとともに共産党を除名されたジョヴァンニ・ロベーダ（Giovanni Roveda）との議論は，ロッシの中心課題の一つ，農業改革をめぐるもので，これは釈放後に出版された[47]。

ロッシは，ヴェントテーネでもやはり，自身の専門である経済，社会政策関連はよく読んでいる。レジーナ・コエリ監獄でも読んだウィックスティードの本はもちろん，経済・財政に関する教科書や理論書も多く，ロバート・オーウェンの古典的著作や，ベヴァリッジの雇用政策に関する論文も読んでいる[48]。ルーズベルト米大統領のニューディール政策について読んだ後には，その実験的政策を，あまりよい言葉ではないが，「なんということだ，まるで精神病棟（madhouse）だ」とまで述べている[49]。また，当時の新傾向として，フランク・ナイトのリスク論なども読んでいる。

すでに高名な経済学者であったエイナウディは，ファシスト政権下でも存続した上院（下院は停止）の議員であり，自由主義者としてマークされていたものの，研究活動や著作活動については妨げられなかった[50]。そのため，ロッシは収容所でも旧知のエイナウディからロッシの弟のパオロを通じて文献の貸与・贈呈を受けたり，論文のやり取りもしている。例えば，1940 年 5 月の書簡では，エイナウディから財政学と税法に関する専門書を各 1 冊受け取り，自身の財政に関する論文をエイナウディが読んでくれたことに感謝している。また，エイナウディはロッシにウィックスティードの著作の翻訳を勧め，弟のジュリオが営むエイナウディ書店から出版させようとしていた。しかし，後になると，収容所内外ともに厳しくなる環境下で，ロッシはエイナウディに研究に必要な本を貸してほしいと頼んだが，戦争末期の混乱の中で本の紛失を恐れたエイナウディからそれとなく断られている[51]。

ロッシもまた，スピネッリなどと欧州連邦主義を研究するグループを収容所内で作っていた。これこそが，「ヴェントテーネ宣言」起草のもととなるのである。

7. ヴェントテーネ島でのロッシの思想形成

ヴェントテーネ島でのロッシの知的活動による思想形成は多くの研究者の関心を集めてきた。ミケロッティはロッシの収容所内でも旺盛な知的活動を「シンク・タンク」に例えた[52]。この表現には，他の収容者との交流による知的影響も考慮されている。一方，ブラーガは，収容所でロッシはそれまでの思想を大きく変えたわけではないが，新しい分野に展開し，これが戦後の彼の政治思想につながっていったとする[53]。

ロッシは，かつてレジーナ・コエリ監獄で傾倒したウィックスティードの別の著作である賃金論をヴェントテーネで新たに読み，自己の思想の政策的実現へと思考を深めていった。経営者の自然な利潤追求の意思を挫かずに，いかに社会全体の生活向上につなげていくかという問いに，ウィックスティードなどをヒントにロッシが出した答えは，私有財産は否定しないし，国家による強制的な集団化も行わないが，私有財産の権利は社会的な制限を受けるというものであった。例えば，イタリア南部に広がるラティフンディア的な地主支配の大土地所有はそもそも非効率的で不平等なのであり，農地改革により土地を分配し，これを大人数の協同組合的な組織に再編することが考えられた[54]。

こうした思想は，ヴェントテーネ宣言の第 3 部「戦後の課題 ── 社会改革」によく反映されている[55]。ヴェントテーネ宣言全体は，スピネッリがほとんどを書いたと言ってもよいが，この第 3 部だけは，ロッシ自身の手も入っているか，ロッシの影響でスピネッリが書いたと思われる部分が相当にある。

この第 3 部では，大前提としてまず，「私有は廃止され，限定され，修正され，拡張されなければならないが，それは原則に縛られて教条主義的に行われるべきものではなく，場合ごとに異なった対応が必要である」という原則が掲げられる。具体的な施策に入ると，「青少年は生存競争の出発点での格差を最小限とするように必要な措置がとられること」とする条項などには，ウィックスティードの影響を見ることができる。

社会の共通基盤であるインフラは国家が独占的に管理すべきものとされた。「必然的に独占的な事業活動を行い，消費者大衆に広く関わる立場にある（たとえば電力産業のような）企業は私有企業のままにはしておけない。（中略）この分野では，既存の権利関係に関係なく，広範な国有化の導入がぜひとも必要である」。この点については，社会主義的な色彩が濃厚である。

また，上述した土地所有の問題については，次のように書いている。「過去に制定された私有権や相続権に関する法律は少数の特権階級に蓄財を許すものであった。（中略）そのため，われわれは耕作者に土地を与え，土地所有者を大幅に増やす農業改革や，非国有部門で協同体組織や労働者株主制度などにより労働者〔による生産手段〕の所有を増やす工業改革を考えるべきである」。イデオロギー的な記述に終始せず，実践的な方法に関心を向けてい

ることに，ロッシやスピネッリの収容所での考察の跡が見られる。

スピネッリとロッシは超党派的な欧州連邦主義運動を進めるために，収容所内でヴェントテーネ宣言を回覧したほか，コロルニの夫人ウルスラ・ヒルシュマンがスカートの中に隠して収容所外に持ち出し，本土の反ファシズム活動家たちにも写しを渡した。

しかし，意外なことに，かつてロッシと同士であった，クローチェ派のリッカルド・バウアー（Riccardo Bauer），ヴィンチェンツォ・カラーチェ（Vincenzo Calace），ソレル主義者のフランチェスコ・ファンチェッロ（Francesco Fancello）らの収容所内の「正義と自由」の活動家たちからは，ヴェントテーネ宣言の記述への批判がメモで寄せられた。彼らから見れば，ヴェントテーネ宣言の改革案は国内・国際の両面で急進的な改革を同時に説くもので，革新的ではあっても，国内でも十分に浸透していない思考に乗って改革を行うことの困難さが意識された。これに対し，ロッシは反論し，それによれば，現実を変革するには，二つの方法があり，一つは同意と説得による民主的方法であり，もう一つは共同行動による「ジャコバン的」方法である。つまり，危機や非常時には民主主義的ルールだけでは自由主義的改革は実現しないし，反動主義と共産主義の間で民主主義者も革命家のように旗幟を鮮明にしなければ，戦後の改革は覚束ない，というものであった[56]。ここには，もともとレーニン主義者であり，共産党から離れても，社会運動に対する考え方は変わっていないスピネッリの影響も感じられる。「正義と自由」の活動家たちはもともとスピネッリの思考を嫌っており，それがヴェントテーネ宣言の評価にも影響した[57]。このやりとりの中でロッシは「正義と自由」の活動家たちと袂を分かつことになった。

一方，ヴェントテーネ宣言全体の基調である主権国家体制こそが戦争を避けがたいものにする根本的な原因であるという思想は，イギリスの経済学者ライオネル・ロビンズ[58]の影響が大きく，ヴェントテーネ宣言の主たる著者と言っていいスピネッリは，自身のマルク主主義的な思想をこれに交えながら，議論を展開している。このライオネル・ロビンズの著作『戦争の経済的原因』（*The Economic Causes of War*）をスピネッリに紹介したのは，エイナウディとも情報交換し，イギリスの研究動向にも通じていたロッシであった[59]。

元共産党員でマルクス主義こそが教養の基礎であったスピネッリと異なり，ロッシは基本的には自由主義者でありながら，純粋な共産主義批判を書こうとはしなかった。というのも，ロッシは既にオーストリア学派の自由主義的な経済学者たちがこの問題を十分に扱っていたと考えていた節があるのである。ロッシは収容所内でハイエクの『集産主義的経済計画』[60]を訳していて，これは 1946 年にエイナウディ社から出版されるが，ロッシの共産主義批判は，むしろ『組合主義批判』（*Critica sul sindacalismo*）『資本主義批判』（*Critica sul capitalismo*）といった戦後に出版された彼の著作の中に間接的に言及されている[61]。

しかし，これらの著作よりも収容所内で培ったロッシの思想がより明確に表されているとされる著作は，1946 年に出版された『貧困を絶滅せよ』（*Abolire la miseria*）である。この本は，古くからロッシが影響されていたフェビアン協会の思想的影響だけでなく，ウィッ

クスティードに習った視点から立論しながら，単に理論的な次元にとどまらず，国家に貧困撲滅のための効果的な政策介入を期待した実践的な政策提言に至っている。ロッシはマルク主義的な論者と異なり，中間層の広範な支持を改革の条件にしていることも，イギリスの論者の影響を受けた，現実的な政策志向といえる[62]。

そして，この本の基調は，ロッシに文献を提供してきたエイナウディの思想とも共鳴している。エイナウディは貧困地域での調査を通じて，経済学は単に学術的なものにとどまってはならず，現実の問題を解決しなければならないと説いていたが，ロッシもまた 20 年代にイタリア南部のバジリカータ州で見た貧困の実態が知的課題であり続けた[63]。

ロッシは 1943 年 8 月に収容所から監獄に移された後に釈放された。内戦期に北イタリアの情勢不安定から逃れたスイス亡命中の 1944 年にサルヴェミーニ宛てに書いた書簡では，「私は自分の自由主義的見解を守るために，より社会主義的かつ，よりジャコバン的になりました」と書いている[64] が，まさにそのような思想展開がヴェントテーネでの知的活動に表れているといえるだろう。「ジャコバン主義」といれば，過激で極端な思想に思われるが，ロッシによれば，それは冷たい合理主義とセンチメンタリズムの中間に位置し，マキャヴェッリにさかのぼるような現実主義を意味した[65]。非現実的なユートピアを描くのではなく，社会改革の政治実践につなげていこうとする考え方である。

おわりに

今日，われわれが「ヴェントテーネ宣言」を読むとき，その基調であるマルクス主義的な世界観と，第 3 部の戦後の社会改革案に含まれている私有財産と公共性のバランスの取れた実践的な記述との違いに違和感を覚えるのは，上述したように，この宣言が主としてスピネッリにより書かれながらも，社会改革の部分ではロッシの影響が色濃いためである。スピネッリのマルクス主義的な世界観に立った主権国家体制批判を支えたのは，ロッシがスピネッリに紹介したライオネル・ロビンズで，このことは今やヴェントテーネ宣言について解説するほとんどすべての文献に書かれている[66]。

しかし，イタリアの研究者たちのロッシ研究が明らかにした，ロッシのより広大な知的世界の中で，やはりウィックスティードの著作の影響が大きいことが証明されている。これは，今日ライオネル・ロビンズがまだ経済学史の中でそれなりに注目されているのと比べれば，意外なことであり，ウィックスティードの著作は，ロビンズほど後世の研究に影響を与えているとはいえないだろう。しかし，この著作の示した自由主義と社会性の絶妙のバランスこそがロッシの思想にマッチし，またエイナウディの思想とも共鳴した「倫理的自由主義」の思想を形成するのに役立った。

戦後のロッシの思想はより先鋭的になり，カトリック教会批判，国家資本主義批判といった形で急進主義の色彩が強くなる。実際，それは 1955 年に左派自由主義的な急進党

（Partito radicale）という小政党の設立をもたらした[67]。この政党はついぞ大きな政党になることはなかったし，ロッシの死後はマルコ・パンネッラ（Marco Pannella）のもとでややポピュリスト的な政党に変質していくが，長く存続しつづけた。キリスト教民主党のもとで国家主導の混合経済で戦後の復興を成し遂げたイタリア政界で急進主義はマージナルな存在であり，異端視もされた。

しかし，グローバル化の中で経済格差が問題とされる今日，ロッシの急進主義の前提にある「倫理的自由主義」の思想を視界に入れれば，戦後世界はその出発点にあった自由主義と社会性の両立という課題を果たして十分に解決できたかという内在的な批判を可能にしてくれるだろう。ヴェントテーネ収容所での知的活動こそがこうした主張の立脚点を作ったのである。

収容所内の読書や研究は限定されていたのであり，決してそこでの沈潜がロッシにとって幸いだったとは言えない。しかし，限られた読書の中で，当時の社会情勢に思考をめぐらし，欧州連邦主義や急進主義など，戦後の政治実践につながるような新しい思想を生み出していったその過程は，やはり創造的な抵抗であったといえるであろう。いわば，当時の支配的な考えに抗して，異なる方法で読み，考えることこそが知的抵抗であった。

〈注〉

（1） ヴェントテーネ宣言とアルティーロ・スピネッリについては，八十田博人「アルトゥーロ・スピネッリ　欧州連邦主義運動の指導者」『日伊文化研究』42（2003），pp. 45–54. ロッシの伝記として，Giuseppe Fiori, *Una storia italiana, Vita di Ernesto Rossi,* Einaudi, 1997.

（2） Filomena Gargiulo, *Ventotene isola di confino, Confinati politici e isolani sotto le leggi speciali 1926–1943,* Ultima Spiaggia, Genova, 2013.

（3） Leonardo Musci, “Il confino fascista di polizia, L’apparato statale di fronte al dissenso politico e sociale”, estratto da: A. Dal Pont e S. Corolini, *L’Italia al confino 1926–1946,* La Pietra, Milano 1983, p. LIII.

（4） *Ibid.,* pp. LIV–LV.

（5） *Ibid.,* p. LXXIII.

（6） *Ibid.,* pp. LV–LVI.

（7） Corvisieri, p. 280.

（8） Umberto Terracini, *Quando diventammo comunisti, Conversazione con Umberto Terracini tra cronaca e storia,* Rizzoli, 1981, p. 121.

（9） Simonetta Michelotti, *Ernesto Rossi, Pianificare la libertà, Il dirigismo liberale da Ventotene agli esordi della Repubblica（1939–1954）,* Ultima Spiaggia, Genova, 2011, pp. 27–28.

（10） Historical Archive of the European Union, ER（Ernesto Rossi）7, ditenzione di Ernesto Rossi（1931–43）所収の文書.

（11） Antonella Braga, *Un federalista giacobino: Ernesto Rossi pioniere degli Stati Uniti d’Europa,* Il Mulino, Bologna, 2007, p. 168.

（12） Michelotti, *op. cit.,* p. 50.

（13） エイナウディの思想については，F. Forte, *Luigi Einaudi: il mercato e buongoverno,* Einaudi, Torino, 1982. ノルベルト・ボッビオ『イタリア・イデオロギー』馬場康雄，押場靖志・訳，未

來社，1993 も参考になる。

(14)　Michelotti, *op. cit.* p. 56.

(15)　邦訳に，クローチェ『十九世紀ヨーロッパ史』坂井直芳訳，創文社，1982。

(16)　Michelotti, *op. cit.,* p. 45.

(17)　そもそも国民ファシスト党自体がその規約（1921，1926，1932，1938 の各年）で自らを「国民に奉仕する民間義勇軍（milizia volontaria）」と定義していた。ファシズム研究会（編）『戦士の革命・生産者の国家』太陽出版，1985，p. 337.

(18)　Musci, *op. cit.,* pp. LXXVIII–LXXIX.

(19)　Terracini, *op. cit.,* p. 123.

(20)　Gargiulo, *op. cit.,* p. 125.

(21)　*Ibid.* p. 123.

(22)　Musci, *op. cit.,* p. LXXVII–LXXVIII.

(23)　Gargiulo, *op. cit.,* pp. 99–110.

(24)　Terracini, *op. cit.* p. 120.

(25)　テッラチーニについては，石田憲「民主共和国への孤独な伴走者：ウンベルト・テッラチーニと憲法の系譜」『千葉大学法学論集』30（2015）–1/2，pp. 115–157.

(26)　Terracini, *op. cit.,* p. 117–125.

(27)　イタリアのアナキストについては，戸田三三冬の一連の研究を参照。例えば，「マラテスタ研究をめぐる史料状況　素描」『文教大学国際学部紀要』15（2004）–1，pp. 1–25.

(28)　Massimo Salvadori, *Resistenza ed azione, Ricordi di un liberale,* nuova edizione a cura di Lamberto Mercuri, Bastogi, Foggia, 1990.

(29)　Gargiulo, *op. cit.,* p. 105–107.

(30)　発祥の地である米国の影響が危険視されただけでなく，「ものみの塔」の冊子のイタリアへの流入が危惧されていた。当時はプーリアの農民の一部に浸透し，収容者のリーダーは女性だったという。Terracini, *op. cit.,* p. 120.

(31)　Gargiulo, *op. cit.,* p. 132.

(32)　*Ibid.,* p. 133.

(33)　Musci, *op. cit.,* p. XC.

(34)　邦訳に，モラーヴィア『無関心な人びと』（上・下）河島英昭・訳，岩波文庫，1991。また，作品の背景について，河島英昭『イタリア・ユダヤ人の風景』岩波書店，2004。

(35)　Musci, *op. cit.,* p. XCI.

(36)　*Ibid.,* p. XC–XCI.

(37)　Gargiulo, *op. cit.,* pp. 134–135.

(38)　これらの書簡は，Ernesto Rossi, *Miserie e splendori dal confino di polizia, Lettere da Ventotene 1939–1943,* a cura di Manlio Magini, Feltrinelli, Milano, 1981 にまとめられている。

(39)　1940 年 12 月 8 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* p. 88.

(40)　1942 年 2 月 4 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* pp. 142–143.

(41)　1939 年 12 月 4 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* pp. 23–24.

(42)　1940 年 8 月 11 日付の母宛て書簡。*Ibid.,* p. 66.

(43)　1941 年 9 月 10 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* p. 121.

(44)　1940 年 12 月 20 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* pp. 93–94.

(45)　Musci, *op. cit.,* p. LXXXVIII.

(46)　Historical Archive of the European Union, ER–8 に所収。

(47)　Musci, *op. cit.,* XC.

(48)　1942 年 4 月 4 日付の母宛て書簡。*Ibid.,* pp. 149–150.

(49)　1940 年 1 月 28 日付の妻宛て書簡。*Ibid.,* p. 36.

(50)　ルイジ・エイナウディの抑圧下の知的活動については，水田洋『知の商人　近代ヨーロッパ思想史の周辺』筑摩書房，1985 も参照。

(51)　1941 年 12 月 20 日付の母宛て書簡。*Ibid.,* pp. 134–135.

(52)　Braga, *op. cit.,* p. 49.

(53)　*Ibid.,* p. 166.

(54)　Michelotti, *op. cit.,* pp. 58–59.

(55)　以下に引用した訳文は筆者による。遠藤乾（編）『原典ヨーロッパ統合史　史料と解説』名古屋大学出版会，pp. 142–149 所収。

(56)　Braga, *op. cit.,* pp. 191–199.

(57)　*Ibid.,* p. 196.

(58)　ライオネル・ロビンズについては，根井雅弘『現代イギリス経済学の群像　正統から異端へ』岩波書店，1989 の第 4 章。

(59)　Edomondo Paolini, *Altiero Spinelli, Appunti per una biografia,* il Mulino, Bologna, pp. 16–18.

(60)　邦訳は『ハイエク全集』第 2 期・第 1 巻，春秋社，2008，所収。

(61)　Michelotti, *op. cit.,* pp. 85–86.

(62)　*Ibid.,* pp. 79–80.

(63)　*Ibid.,* pp. 86–87.

(64)　*Ibid.,* p. 145.

(65)　Braga, *op. cit.,* pp. 129–130.

(66)　例えば，John Pinder, “Federalism in Britain and Italy: Radicals and the English Liberal Tradition”, in: Peter M. R. Stirk (ed.), *European Unity in Context: The Interwar Period*, Pinter, 1989, pp. 201–223.

(67)　急進党については，Guido Aghina, Claudio Jaccarino, *Storia del Partito radicale,* Gammaliberi, 1977.

［付記］　この論文は，科学研究費補助金・基盤研究(B)「第二次大戦後ヨーロッパの「新秩序」構想の政治史的分析」（平成 26 年度〜29 年度）の研究成果の一部である。

Intellectual Resistance in Anti-Fascist Political Prison Camps:

The Case of Ernesto Rossi, for the Understanding of the Writing Process of the Ventotene Manifesto

Hirohito Yasoda

The Ventotene Manifsto, a famous historical document of European federalist idea, was mainly written by Altiero Spinelli, through the collaboration of Ernesto Rossi, activist of the anti-Fasist movement, “Justice and Liberty” (Giustizia e Libertà).

Rossi’s contribution to the Ventotene Manifesto is already well known, such as his introduction of the criticism on the sovereign state system of Rionel Robbins to Spinelli, however, his energetic gathering of knowledge in the prison camp reached far more profound depths. Italian scholars of intellectual histoy have recently revealed that his “ethical liberalism” was much influenced by the works of Philip H. Wicksteed.

Against the hardships that he faced in prison camps, now elucidated by local historians, Rossi made his political pathway to radical liberalism, as an alternative to Fascism and national capitalism, by use of many books in the prison and conversations with many political intellectuals there.